曹洞禅ジャーナル

法眼

第8号　2001年4月

高祖道元禅師７５０回大遠忌について

秋葉玄吾
北アメリカ開教総監

2002年の4月から10月にかけて、大本山永平寺に於いて道元禅師750回大遠忌が曹洞宗門の総力を結集して厳修されます。

それに先立ち、今年5月12日(土)、ロサンゼルス禅宗寺において、その予修法要が修行されます。

このアメリカの地の道元禅師門流の方々には、赤心一片の道念をお示しいただき、出来る限りご参集を賜り、敬仰追慕の情をお捧げ願いたく、広く呼びかけたいと存じます。

以下大遠忌について若干説明をさせていただきます。

この大遠忌は50年毎に日本曹洞宗門あげての行持として厳修され、敬仰尊崇の心を新たにし、道元禅師の宗教上の偉業を見なおす機会となし、なんらかの事業を行い、宗門の内容を整えていく作業が営まれています。

丁度2000年は道元禅師の生誕800年祭に当たりました。日本各地にて、その生誕を祝う様々の行事が、宗門の僧俗一体となり盛大に挙行されました。アメリカにあっても、一昨年、幾箇処の地において、道元禅師生誕800年を祝う記念のシンポジウムやカンファレンス、講演会などが行われました。

キリスト教世界では、ジーザス・クライストがこの世に降臨なされた生誕の日を重視し、各教会は、クリスマスの夜キャロルとミサの儀式を厳かに行います。西洋社会はその影響により、偉人の生誕祭を盛大に挙行し、その遺徳を偲びます。それ故、このアメリカの地においても、道元門流の方々の手により、その生誕800年を慶讃する様々の行事が催されたのでした。

ところで中国儒教の影響を受けた日本人の心性は、古来人の生誕より、その忌日を重んじ、その祖霊への報恩を想うことを習慣化し、培ってまいりました。

そのような心性社会に生きた日本曹洞宗の祖師方が開祖の遠忌を行ってきた意義は次のように考えられます。

北アメリカの各禅センターの創立者各師は道元禅師のお教えを、この地に根づかせようと努力を尽くしました。道元禅師への思慕・崇敬の念が深く重くなければなしえない弄精魂です。それを受け嗣いだ、この地の道元禅を行ずる方々は、創立者への厚い感謝と尊敬の念を忘れず、様々な形でその顕彰事業や、日々の行持の中で、後世の人々へその教えを永く伝えようと静かな精進をなされております。それは即ち、お釈迦様、道元禅師、祖師方への最大の報恩行であると申せます。宗教世界の美わしい継続性への願いは、洋の東西を問わず、人間が持つ崇高な魂より発せられる普遍的な希望であり、人間が失ってはならない尊厳性であると申せます。

日本の曹洞宗の祖師方が50年ごとに、道元禅師の忌日を契機として、その教えへの敬慕の念を表現し、法会を営み顕彰事業をなされたのは、最も人間的な、自然な、尊い営為であったといえるでしょう。

さて、日本の祖師方がどのように高祖道元禅師への崇敬の念を表現されてきたか、熊谷忠興師の「大遠忌の歴史」と題した記事を参照し、ざっと遡ってみましょう。

二祖懐弉和尚は、道元禅師が最後にお示しされた「正法眼蔵八大人覚」の末尾に「若し、先師を恋慕し奉らん人は、必ず此の十二の巻を書して、之を護持すべし。云々」と記されています。御開山様への報恩追慕をなす第一は、遺著の書写を続け、整備することであると考えられていたのではないかと熊谷師は述べます。

また、「永平寺史」には懐弉和尚は、先師の二十三回忌に当り、誓願文を立てられたという記事が見られます。尽未来際にわたって道元禅師をお護りするとの孝順心をしめされ、承陽塔を建て、生きておわすが如く道元禅師におつかえして、晩年を過ごされています。

今でも永平寺の承陽殿では、その御尊像へ恙なくお目醒めですかと礼拝し、道元禅師が「洗面の巻」で示されたように洗面をし、茶を点じ、粥を献じ、三時の諷経を奉り、二祖様がおつかえした如く孝順心を伝えています。

その頃懐弉和尚とともに、三世徹通義介や五世義雲は永平寺教団護持発展につとめ、遺著の整備顕彰に力を尽くしています。

1295年、道元禅師が示寂された32年後、加賀・大乗寺にて瑩山禅師は義介和尚に入室し、二祖所伝の法衣を受けています。この瑩山禅師は「伝光録」「清規」などを著し、道元禅師の教えを人々の間に伝えられ、曹洞宗教団が形成されました。その後、曹洞宗は発展していきました。

道元禅師の大遠忌がいつの頃から行われたか、記録として確認されるのは、300回忌からです。永平寺14世建撕和尚の

「建撕記」(永平開山道元禅師行状建撕記)に1552年8月28日に奉修されたと記されています。

それ以後の50年ごとの大遠忌は種々の記録に残り伝えられています。それらを箇条書きに遡ってみましょう。

350回忌は江戸時代の初め、1602年(慶長7年)8月、20世門鶴和尚が山門を新築して奉修。

400回忌は27世英峻和尚が仏殿等を新築して1652年(承応元年)修行。英峻和尚は、幕府より寺院法度が定められ、次いで永平寺の住持が関東3ヶ寺から順番に昇住するという制度が決まり、その最初の住職であった。

次いで450回忌は1702年(元禄15年)8月のことで、37世天梁和尚の下で修行。この前後、道庸和尚が経豪和尚の「正法眼蔵影室」30巻を書写。また宗門中興と称される卍山道白和尚が幕府に訴えていた「師嗣面授一師印証」問題が解決。

そして500回忌は1752年8月(宝暦2年)43世密厳和尚代に修行。この遠忌前に現在の山門が再建され、この回忌にあたり法堂が新築されている。また当時の宗学者、面山瑞芳和尚が御開山の著述を蒐集整理されている。この時の大遠忌には上山寺院２万数千人に及んだと侍真を努めた万仭道坦和尚が記録している。

次いで550回忌は1802年(享和2年)8月に修行。当時の住職は50世玄透和尚で、ほとんど疲弊していた永平寺の復興に尽くされた。晋住されてすぐ、旧来の明朝風僧堂を解体し、永平清規に準じた僧堂(横12間・縦9間)を建立し、二時の粥飯や看経、三・八の念誦の道場と定められた。妙高台を再建。また「古規則復古」と題し、高祖の精神に戻る運動を起こす。さらに「正法眼蔵」を開板すべく、穏達、俊量両和尚を幹事に任命、原本の校合、資金の勧募にあたらせた。遠忌正当法要に献本されたが完結まで10年余りの歳月を要している。

また、600回忌は60世臥雲和尚によって、1852年(嘉永5年)8月に修行された。アメリカのペリー提督率いる艦隊が江戸湾に浮かぶという世相の頃、永平寺では伽藍の改築整備が進められ、梵鐘を鋳造したり、経蔵を新築して、回忌が修行された。このころ道元禅師に「佛性伝東国師」号が孝明天皇から宣下された。これは江戸幕府大老井伊直弼の助力による。この法莚には10万人の参詣があった。

次いで650回忌は64世悟由和尚代の1902年(明治35年)5月に奉修。今日の仏殿や僧堂が新築され、旧来の七堂伽藍も拡大され、今日見るが如き伽藍配置に整備された。

さらに700回忌では戦後の混乱期を経て、1952年(昭和27年)5月熊沢泰禅和尚によって奉修された。この折りには不老閣と衆寮、接賓を新築された。

以上が高祖大遠忌の概要です。

さて今回750回大遠忌のテーマは「慕古」であります。お釈迦様の真実の道(古道)を慕い学ぶという意味です。即ち道元禅師の提唱なさる坐禅を実修することです。お釈迦様の説かれた真理を身と心で学ぶことが坐禅なのです。道元禅師は「現成公案」の中で述べられます。

坐禅は自己とは何かを問うことです。自己を何かと問うことは自己を忘れる、答えを自己の中に求めないことです。現像、環境世界の中ですでに自己は実証されているのです。すべての存在の中に我を証し、諸現像の中に自我の存り様を証してゆくことが、自己を忘れるということなのです。自己の存在認識を支える自我を脱落させて、真我—自性を無辺際な実相の真只中で証明してゆく。すると真理は全宇宙の側からみずからには覚知されないまま、自分に顕現してくるのです。その時、自己は忘れ果られている。坐禅は法(全存在の根源性の究極は空性である)を只だ行ずることです。それが色即是空である。そして、その時、同時に空即是色が鮮明に自己に覚知されてくるのです。

道元禅師はそれがお釈迦様の坐禅であると述べられます。お釈迦様はそのように坐禅をされることにより、真実の世界に目醒められ、人間の苦を超え、深い心の安らぎを実現された方なのだ、と道元禅師は把握されます。

この坐禅による人間の問題の根本的解決の教えを道元禅師は、そっくりそのまま日本へ伝えられました。その素晴らしい教えを日本の人々に弘く伝えられたのが瑩山禅師でした。幸い、700回忌から今回の750回忌の大遠忌の50年の間、自己をならう、自己を何かと問うことは坐禅にひたむきになることだと説かれた道元禅師様の教えを、このアメリカの地で実践する方が多数産まれてまいりました。坐禅に生きることにより、人生の苦を解決されたお釈迦様と同じ安らぎの人生を生きる方が多くなればなるほど、この世界、地球は平和になる、とわたしは希望を持っています。

20世紀の高度な文明を21世紀に引き続き牽引してゆくでありましょうアメリカの、より多くの人々がお釈迦様や道元禅師の教えに気づき、実践されることは、生き物すべての幸福の基盤であるこの地球にとって、非常に重要なことであると考えます。

例えばお釈迦様は人生苦の根本的解決は欲望の抑制にあると考えられ、最後の説法に少欲・知足の人間の在り方を説きます。道元禅師は、少欲・知足を次のように規定します。「まだ得られない五欲(眼耳鼻舌身)の対象(色声香味触の欲望)について、広く追い求めないのを、少欲と名付ける。」「すでに得られたもののなかでも、それを受け取るのに限度をもってする、これを知足と称する。」

こういった空の世界観に裏打ちされた生き方の規定は、この21世紀の予想される様々な深刻な問題、人口増加、資源涸渇、食糧不足、環境悪化など、人間苦(ばかりではなく生き者の苦)を増大させる諸条件の緩和に役立つ、最適の方途ではないでしょうか。どんな問題であれ、結局は人間の自己の在り

方、生き方に帰着するからです。

この世界、地球が豊かであれば、その豊かな自然現象の中で実証される我々も豊かになります。

坐禅を生きることにより、仏道と自己が同一であると見られた道元禅師の、2002年の永平寺での大遠忌法要、今年5月12日のロサンゼルス禅宗寺での予修法要を迎えるに当たり、道元禅師にご縁をもたれた皆様には、「慕古」のテーマをご理解いただき、多数ご参集賜りますよう、重ねて広く呼びかけたいと存じます。

正伝の仏法(道元禅)と中国南宋時代の禅

道元禅師が中国曹洞禅から受け継いだもの

石井清純
駒澤大学仏教学部助教授
スタンフォード大学仏教研究所　客員研究員

近来、空手にて郷に還る。
所以に山僧、仏法無し。
(『永平広録』巻1,第48上堂,原漢文)

唐代(618-907)に五家として発展した禅宗も、南宋時代(1127-1279)には、臨済宗楊岐派が擡頭する形で次第に収束に向かっていた。しかしその中にあって曹洞宗もまた、丹霞子淳(1064-1117)とその弟子たちによって黙照禅が標榜され、確実にその法脈を伝えていたのである。

道元禅師(1200-1253)が中国の禅に触れたのは、西暦1220年代のことであるから、禅師の見聞した禅は、この二つの流れの延長線上にあった。そして、道元禅師は、当時全盛を極めていた臨済宗ではなく、曹洞宗の法系を選び取ったのであった。

道元禅師自身の『嗣書』は次のような法の流れを私たちに示してくれる。

芙蓉道楷～丹霞子淳～真歇清了～天童宗珏 ～雪竇智鑑～天童如浄～道元禅師

これをみれば、彼が曹洞宗の系譜上に位置していることは、紛れもない事実である。

しかし、道元禅師は、「この曹洞の称は、傍輩の臭皮袋、おのれに斉肩ならんとて、曹洞宗の称を称するなり」(『正法眼蔵』「仏道」)と自分の禅を曹洞禅あるいは曹洞宗と呼ぶことを嫌った。これはいったい如何なる意味をもつのか、以下では、それを明らかにしてゆく形で、中国の禅と道元禅師の禅との接点を見てゆくことにしたい。

黙照禅と道元禅

事実上の法の流れだけでなく、思想的な特徴についても、道元禅師の禅は中国曹洞宗の禅、即ち「黙照禅」に近い。ただし、全面的に同一ではない。

「黙照禅」とは、上の系図の真歇清了(1088-1151)と、その兄弟弟子の宏智正覚(1091-1157)の時代に集大成した宗風である。黙照の「黙」は坐禅を意味し、その中に、本来仏である自己、即ち「証」を見出す(照)というものである。その特徴は、以下の三点にまとめられる。

(1) 本来清浄なる自己の強調。
(2) それゆえの、「悟り体験」の否定。
(3) 悟っているものとしての坐禅の強調。

このように、「黙照禅」とは、あくまで本来清浄なる自己が坐禅によって体現するものであることを強調した。それゆえここには、ある瞬間の、特別な体験としての「悟り」の入り込む余地は無い。これは例えば、宏智が「真実の做処はただ静坐黙究なるのみ」(『宏智録』)と述べていることによっても知れよう。

では、この「黙照禅」と道元禅との類似性を見てみよう。

まず第一にあげられるのは、「悟り体験」の否定である。道元禅師は、『弁道話』の中で、「一生参学の大事ここにおはりぬ」と述べられながらも、それをけっして「大悟」とは呼ばなかった。その瞬間を「身心脱落」と名づけていることからも、それは明らかである。

第二には、「只管打坐」の強調である。これは、仏としての坐禅であり、上の(3)、すなわち「仏としての坐禅の強調」に相当しよう。

そして、「自性清浄」の教えが、六祖以来の禅思想の伝統であることを考えれば、道元禅師の禅が、黙照禅を受けたものであるとすることに異論をさしはさむことは不可能である。

しかし、近年の研究によれば、このような類似点を持ちながらも、道元禅は、中国曹洞禅のすべてを、無条件に受け入れたものではないことが明らかになった。

いまここでは、それについて詳細に論証した石井修道博士『道元禅の成立史的研究』(1991,大蔵出版)を要約する形で、それを見てゆくことにしたい。

まず、黙照禅の問題点を明確にするために、『宏智録』の次の一節を見てみよう。

渠、修証にあらず、本来具足す。他、汚染せず、徹

底清浄なり」(人は修行も悟りもない。もともと(仏として)完成している。その人は(はじめから)汚れることなく、徹底して清らかなままなのである。)

この一節は、宏智が、思想的前提に「坐禅」を置いていることを考えれば、「坐禅の徳」を示したものと解釈すべき文章である。

しかし、その前提を抜きにしてこの文章を見るとどうなるであろう。そこには、「本来仏であること」の強調のみが残され、修行の必要性はまったく出てこなくなってしまう。このように、「黙照禅」は、この本来性(本証)を修行の必要性(妙修)よりも強調する傾向にあった。

道元禅師が危惧したのは、まさにこのような「修行無用論」であった。本来仏であることにあぐらをかくと、まさしく宗教的実践は何も行えなくなってしまうのである。

そこで、道元禅師は、それを正すために「仏ゆえの修行(妙修)」に力点を置く。「もともと仏である自己」という基本的な立場を踏襲しつつ、それが、あくまで「坐禅」、あるいは「自己研鑽」しているという状態においてのみ働いているとし、修行の重要性を再確認した。それによって、悪しき無事禅(修行否定の禅)に陥ることを未然に防いでいるのである。それが、道元禅師の禅の特色ということになるであろう。

これを、道元禅師は「正伝の仏法」(釈尊より正しく伝わった仏法)と呼ぶ。そしてこれは、釈尊成道の瞬間の行を正しく受け継いでいる、という道元禅師の自負心から発せられた言葉なのである。

最終的に、道元禅師が「曹洞宗」あるいは「禅宗」という名称を否定される縁由はここにある。つまり、禅師はこの「正伝」を、ある特定の宗派という固定的な枠組に嵌め込んでしまうことを拒否されているのである。

看話禅批判

同じ宋代に展開した禅に、大慧宗杲(1089-1163)の「看話禅」がある。これは、「黙照禅」を批判する形で成立したものであるが、これを道元禅師は厳しく批判した。

いまここで、少しく大慧の看話禅を見て、道元禅師の批判点を明らかにしておくことにする。

まず、大慧が批判の対象とした「黙照禅の特徴」であるが、それは先にのべた「修行無用論」的要素に他ならなかった。つまり、大慧の看話禅創唱は、道元禅師の「正伝の仏法」の確立と、動機を同じくしているということになる。

しかし、そこには方法論に大きな違いがあった。

大慧宗杲は、修行を積極的に導入するために、あえて「現実の我々は迷っている」という「始覚」の立場に立った。そしてそこから、公案を熟考するという「悟りへの努力」により、「悟り」を体験すべきことを主張したのである。これを、大慧は「以悟為則(悟りを以て則と為す)」と表現している。

このように、「悟り体験」を強調した看話禅は、その明解さゆえ多くの在家信者を獲得し、南宋代の禅宗叢林を席捲する勢いを得た。しかし、冒頭に述べたように、道元禅師はこれを受け入れることなく、逆に次のように批判された。

宗杲禅師なほ生前に自証自悟の言句をしらず。いはんや自餘の公案を参徹ぜんや。いはんや宗杲禅老よりも晩進のもの、たれか自証の言をしらん。(『正法眼蔵』「自証三昧」)

「本来的な悟り」を否定した大慧とその弟子たちは、それゆえ「正しい悟りの本質」を見失ってしまったというのである。つまり道元禅師は、大慧の禅を禅の思想的伝統から逸脱したものと捉えていたのである。さらにまた、大慧が、禅師と同じ「修行の必要性の再認識」を旗印にしていただけに、それをことさらに強く否定する必要があったのであろう。

石井修道博士は、このような受容と批判の形式を次のように総括されている。

道元禅師はそっくりそのまま無批判に宋朝禅のすべてを取り込んだのではなく、大慧に反発しつつ、しかし大慧が行ったのとは別の方向でその悪しき宗弊を打破し、純一な仏法としてこの日本に花開かせたということになるであろう。それゆえに、道元禅は、中国曹洞宗という枠組を越え、純一な仏法としてとらえるべきものとなるのである。(『道元禅の成立史的研究』)

正伝の行持

さて、道元禅師と南宋禅との思想的な関係について考えてみたのであるが、最後に,いまひとつ道元禅師自身が、中国から正しく伝えたものとして主張されたものについて触れてみたい。

それは、禅の純粋叢林機構と、各種の行事である。

これは、『正法眼蔵』には、あまり多くは触れられていない。それゆえに、看過されてきた感も無しとしない。しかし『永平広録』に目を移すと、そこにおいて禅師は、現在我々が営んでいる成道会に始まり、上堂や晩参といった説法の形式、それに僧堂という伽藍形式まで、叢林が成り立って行くのに重要な儀式や機構は、みな道元禅師が中国から持ち帰ったものだと言われるのである。

例えば、『永平広録』には次のような上堂が記録されている。

(1) 臘八上堂、日本国の先代、曾つて仏生会・仏涅槃会を伝う。然れども、未だ曾つて仏成道会を伝え行ぜず。永平、始めて伝え、已に二十年なり。今より已後、尽未来際に伝え行ぜん。
(『永平広録』巻5、第406上堂。原漢文)

(2) 当山始めて僧堂有り、これ日本国始めて之を聞き、始めて之を見、始めて之に入り、始めて之に坐す。学仏道の人の幸運なり。
(『同上』巻4、第319上堂。原漢文)

この他、道元禅師が、典座の正しい意義を伝えるために

『典座教訓』を著わされたのはあまりに有名である。とまれ、道元禅師は、これらの行事の正当性に絶対なる自負心を持っておられた。そして、それこそが、仏教に帰依するものの理想の姿だというのである。

しかし、ここで歴史を振り返ってみれば、ここに見える行持は、曹洞宗という一宗派に止まるものではない。中国唐代の百丈懐海(749-814)以降、禅が、独自の修行形式を打ち出し、自らの足で確と地面を踏み締め出した頃の、普請作務と坐禅を中心とした宗教活動を今に映し出すものなのである。すなわちここにも、禅師自身が「曹洞宗」という呼称を嫌った理由を見出すことができるであろう。

禅宗は、9世紀に初めて宗派として独立したと言われる。そしてそれは、インド以来の僧侶の規定と、教団の運営方式を覆し、日々の生産的活動の中に仏法としての意義を見出すという、一種の宗教的革新運動であった。

その後、中国では五山十刹制度が確立され、禅宗は大きく発展する。それは、室町時代に、日本に移植され、ここに日本における禅林機構が確立した。

しかしそれらは、あくまでも時の権力者と結びつき、作り上げられた政治的な機構であった。

道元禅師は、そのような権力との結びつきを嫌った。そして、越前の地に、如浄禅師を通して付け継いだ、唐代に確立した禅の純粋叢林そのものを形作ろうとされたのである。

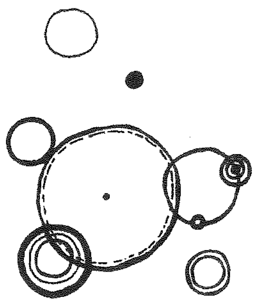
つまるところ、道元禅師が意識された中国禅とは、この、最も純粋で最も活力に満ちた、創成期の禅そのものであったと言えよう。

もちろん、禅師は直接に唐代の禅を見聞したわけではなかった。その意味では、それは禅師の胸中に理想化されたものともいえるのである。しかしそれでもなお、それは、初期禅宗の純粋で伝統的な叢林形態を維持する意図の下に伝えられたものに他ならないかった。

伝統的形式の踏襲というと、一種、無批判な伝統の墨守を意味しているかのような印象を受ける。しかし、道元禅師が、けっしてそのような意識の下に伝統的行持の実践を強調されたのではないことは、上に述べた思想的背景により明白である。むしろそれは、歴史的事実としてはインドの叢林生活とも、また禅師が直接体験した南宋禅林の全体像とも違ったものであった。まさしくそれは、時代に対応し、そこに、仏道を修行する最良の環境を作り出すための精力的な活動だったのである。

道元禅師の教えを、このような観点から捉えると、その存在意義は往古の日本にとどまるものではなくなる。それは、現代に生きる我々にも、社会と一体となった、より生き生きとした宗教的生活・生命活動をもたらす極めて柔軟な教えであった、と私は信じる。

道元禅師の750回大遠忌を迎える今、21世紀の始まりと共に、その精神性と実践性を、今一度問い直すよい機会なのかもしれない。



中国への巡礼の旅
ー我々の精神的伝統の源ー

天真・アンダーソン
グリーン・ガルチ・ファーム

我々の伝統の源泉に出会うため、私たちは去年9月に中国へ旅立ちました。それは、特に禅と呼ばれるかたちの仏教の修行とその表現が生まれた土地への巡礼の旅でした。我々一行は、僧侶と在家修行者を含んだ禅センターの居住者、メンバー、及びその友人たちからなりました。このツアーは"南宗禅の祖師の旅"と呼ばれました。

1223年、道元禅師は正師を求め、自らの疑問を解くために中国へ旅立ちました。私たちの動機はそれとは違い、過去の真実の祖師を表敬訪問するための拝登の旅でした。それらの祖師方のおかげで、我々は今、仏の道に生活を委ねることができるのです。私たちは自らの疑問を解くために行ったのではなく、曹洞禅を形成した祖師方が、修行と証悟を培い円熟された具体的な場所を訪ねるために行ったのです。

この旅行では13の寺院を訪れました。私たちは朝食前に起床して通常1～2 炷 の坐禅を行じました。これから出会う過去の祖師方の仏跡に対して親しい存在の感覚を生じさせるために、お寺に近づくときには、我々はバスの中で沈黙を守りました。

私たちは、通常1～2時間かけてお寺を参拝しました。ほとんどのお寺は一般公開されており、その中のいくつかは大変混み合っていました。多くのお寺で、在家信者の数は僧侶の数をはるかに超えていました。全てにおいて、私たちがここアメリカで常としているものと、かなり異なる感じがしました。明るいピンク色のものも目立つ、おびただしい数の線香

が本堂の正面の大きな線香立てで燃えていました。信者のほとんどは女性で、線香をあげ、拝席の上で三拝していました。そして何人かはその時にお祈りをしているようでした。我々が訪れた最初の2つのお寺は、禅の歴史に関して言えば注目に値するものではありませんでしたが、それらは私たちを一般の中国の寺院の風景に順応させてくれました。

広東省にあり、中国南海岸の近くの大きな都市である広州に到着した時、私たちは皆、六祖慧能のことを考えていました。この街の市場を歩いていた時に、慧能は「金剛経」の一節を聞いたのでした。それは「菩薩は何処にも住まない心を起こすべきです(応無処住而生其心)。」というものでした。これを聞いたとたん、後に六祖となる無学の薪売りは目覚めました。また、広州市で我々は光考寺を訪ねました。ここは、慧能が20年間森の中で過ごした後で、出家得度を受けたお寺です。

そして我々は曹渓山を訪ねるべく、北方の韶関市へ汽車で向かいました。それは慧能がお教えを説いておられたお寺でした。我々の多くにとって、これは、巡礼の旅の中でもとても重要なお寺となりました。慧能は「六祖壇経」にその言葉が残されているように精神的に非凡な才能を備えた人物でした。彼は経典やその注釈書で使われた専門的仏教用語に頼ることなく、仏教の修行の教えを広く明確に述べた、禅の形成者達の先駆けでした。唐代の、禅の黄金時代と定義された、素晴らしく、個性的な禅匠たちが輩出して花開いたのは、慧能の直接的で、斬新な教えのスタイルの成果でした。

「不二の法門」と名付けられた門を通って仏殿へと進んだ時、私はこの寺全体が慧能の御身であるという感覚を強く打ちつけられたのです。それは予期しない、そして圧倒的なもので、私は涙を誘われました。仏殿でお拝をすると、そこには偉大な祖師の真実の生活のいきいきとした感覚がありました。私たちが訪れたどのお寺にも、初期の祖師の時代の建築物はほとんど残ってはいませんでした。しかしながら、大地と山や空はそのままでした。同様に、活力に満ちた修行生活の感覚は何世紀にもわたって受け継がれていました。建物は朽ちてしまいましたが、祖師を尊び、祖師が世界の人々と分かち合ったあかりを灯し続けようという意志によってそれらは再建されました。慧能の修行と悟りの徳は、彼が尊ばれているお寺と同様に生き続けます。

主要な伽藍の後ろを歩いていくと中庭がありました。「六祖壇経」の全文が、石壁に彫られ、後ろには九龍の泉がありました。慧能がこの場所に錫杖を突き刺すと泉が湧いた、と言われています。多くの参拝者は、そのありがたい水をもらうために、泉源に群がっていました。群衆の熱気と笑いの中ではじける水は喜びにあふれ、活気がありました。

次のお寺はすぐ近くの、雲門禅師がお教えを説かれた大覚禅寺でした。開山堂にある像は雲門禅師のミイラであるとのことでした。ここは、私たちが修行者達の諷経の様子を見ることが出来た最初のお寺でした。

そして、私たちは広州まで戻り、北隣の江西省にある南昌市まで飛行機で行きました。私たちは馬祖大師がお教えを説かれた佑民寺へ拜登しました。このお寺では、私たちは実際に法要に加わることを許されました。そこの僧侶や在家の人たちと同じように読経することはできませんでしたが、彼らに加わってお拝や巡堂、そして、そこにいるということを通して、私たちの帰依の念を表わしました。

そして私たちは、その景勝のために詩人たちによって讃えられ、多くのお寺（寺跡）がある廬山に向かいました。廬山の麓で、私たちは慧遠がお教えを説かれた東林寺に拝登しました。慧遠は中国史上、最も重要な僧侶の一人でした。そこは、数百の阿羅漢の像で一杯の壮観な御堂がある、美しいお寺でした。

予定外ではありましたが、多くの参加者にとってとても重要となったのは、丁度東林寺の隣の尼僧寺である西林寺へ拝登したことでした。Enlightenment Ocean（悟洋？）という名の尼僧は意気込み、喜んで私たちを迎えてくれました。短時間の滞在でしたが、女性だけの修行道場の活力と寛大さをかいま見ることが出来ました。

私たちは次の2晩を廬山の頂上の峰の一つで過ごしました。ギザギザした山頂が霧の大洋に浮かんで、昔を偲ぶ中国の風景画そのままでした。頂上の近くで、私たちは小天池という名前の密教のお寺を訪れました。思いがけなく、大きい塔と合わせてチベットの図像にも出会いました。私たちは管理人達に暖かく迎えられ、また台湾出身の在家の指導者と話しをしました。

廬山の反対側に下りて、私たちは能仁寺を訪れました。そこでは1か月に及ぶ長い得度式を行っていたため、私たちの訪問は簡単なものとなりました。100人以上の僧が、仏殿の前の戒壇で得度を受けていました。私たちはまた、短い時間でしたが現在の中国における主な禅の修行道場の一つである雲居寺の住職、Yi Cheng師との語らいを楽しみました。

そして、四祖道信、五祖弘忍のお寺を訪ねるために、北上して、湖北省へと向かいました。四祖のお寺は再建工事のちょうど最終段階にありました。公式の落慶式が数日後に迫っていたので、膨大な責務に人々は大わらわでした。労働者全員とその子供達、そして多くの参拝者がいたので、とてもにぎやかな雰囲気でした。私たちは、400メートルほど歩いて、お寺を見渡す丘にある四祖のお墓まで登りました。太陽は明るく輝いていて、お墓は色とりどりの花に囲まれていました。そして、私たちは「一行三昧」を説かれた偉大な祖師のお墓の周りを行道しました。

そして、五祖のお寺へと自動車で移動しました。そこは人気が少なく、静かでした。ここは慧能が五祖に出会って、米を搗く任に当たられたお寺です。私たちは、その米搗き部屋

に案内され、慧能本人が使っていたといわれる石碓を見たのでした。その夜、私たちは南昌へと戻りました。

翌日、私たちは普利寺への長い道のりへ出ました。このお寺は曹洞禅を形成した祖師方の一人である洞山禅師によって開かれました。この旅では、私たちは砂利道を何時間も移動して、中国の田舎の奥深いところまで行きました。自動車道の果てるところまでたどり着いて、お寺への道を登り始めました。数百メートル登ったところで、小川に出ました。これは、洞山が水に映った自分の影を見て大悟した小川でした。洞山は詩偈を作ってそれを讃えたのです。

切忌從他覓　迢迢與我疎
くれぐれも外を探してはならぬ
はるかに自分と遠ざかる

我今獨自往　處處得逢渠
自分は今独り行くが
いたる処で渠に逢う

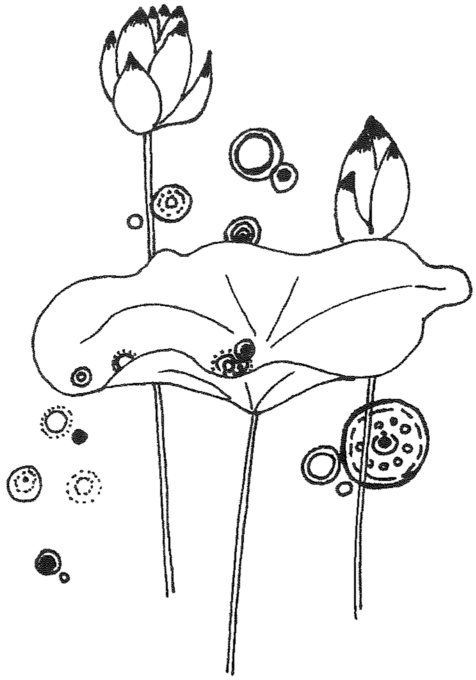
渠今正是我　我今不是渠
渠は今や自分に他ならぬ
自分は今、渠ではない

應須恁麼會　方得契如如
このように理解して、初めて如如と契う
（景徳伝燈録15，洞山良价章）

洞山は小川のすぐそばに僧堂を開きました。その小川を見、そして美しい林を歩くことで、洞山の魂を感じることができました。僧堂自体はさらに数百メートル道を上がったところにありました。この小さなお寺を世話していたのは、たった2人の僧侶で、彼らは私たちにお寺の伽藍を案内し、千年以上経った洞山の墓へも案内してくれました。私たちはお墓の周りをまわり、心からの尊敬と感謝の念を偉大な祖師に捧げました。

この寺は人里離れたところにあり、参加者の多くが修行したことのあるタサハラ禅マウンテンセンターを思わせました。そこにたどり着く長い道のりは、深く静かな自然の美とともに、巡礼の旅に素晴らしい結末を用意してくれました。私たちの伝統の実際の起源である開祖のお寺にたどり着いたのです。私たちはまるで我が家にいるようで、このお寺を訪れただけでも、この旅に参加した価値があったと私たちの多くは感じたのでした。

1227年、道元禅師は日本に帰国されました。そして、如浄禅師やその他の人々との修行と悟りの経験をもとに、時待たずして教化の生涯を始められました。その記録は700年以上経った今でも享有することができるのです。私たちは伝統の根源であるいくつかのお寺での体験を携えて中国から帰ってきました。これらの出会いを通して、私たちは、いまでも続いている仏祖の生命の喜びを、身体、心、精神で感じることができました。私たちが注意深く、そして感謝の気持ちを持って学んだ祖師方の話や教えは、私たちの想像の中で、新しく具体的な構成要素を持つようになりました。またこの素晴らしい生きる道を伝えられた祖師方に敬意を表するこれらの崇高な仏跡で、私たちは心からの感謝と帰依の念を表すことができたのでした。



アメリカの曹洞禅（3）
緩やかな伝道者たちの仕事ぶり

ジョン・マクレー
インディアナ大学

仏教徒は緩やかな伝道者である。仏教の歴史上において、時折り、攻撃的に、少なくとも活力的に折伏するという前例も無くはないけれども、他宗教の人々に自分の宗教を押し付けるというよりはむしろ、求められて初めて教えるというのが、より一般的なパターンであった。これは古来からの型である。実際に仏教は世界中で最初の伝道宗教であった。そして、釈尊の偉大さは精神的な洞察力だけではなく、組織の創造者としての能力においても明白であった。釈尊とその弟子達が創出したサンガが、現在のインド・パキスタン・アフガニスタン・中央アジアにわたる様々な公国や地域的な小国家

群に広がったとき、そこには彼らの教えを熱心に探し求める人々のグループが十二分にあった。中国・朝鮮・日本、あるいは後代のチベットへの仏教の伝播は、新来の、仏と菩薩の宗教の力がその地域社会に利益を与えるのか、またはそれを崩壊させるのかをめぐって、しばしば政治闘争をひき起こした。しかし、人々の関心は、信仰というよりもむしろ、儀式行為が有効なものかいなかにあった。キリスト教やイスラム教は、仏教とは比較にならないほど精力的な伝道宗教となり、特に後者は大衆を改宗させるために、プログラム化された戦略を展開させてきた。歴史的事実として、イスラム教徒に対しての課税免除はイスラム教の布教を促進するうえで、剣以上に大きな効力があったようである。

アメリカで仏教に改宗した、あるいは、その活動に参加することによって、部分的な改宗とも名付け得るような経験をした私たちの多くは、誰か他人から押し付けられるのでは無く、自分自身で考えて納得した後に受け入れるべきだと公言する、非常に非攻撃的なこの宗教の姿勢を深く評価している。アメリカの曹洞禅仏教徒は彼らの宗教を普及させるにあたって、この受動的な態度を保持している。もちろん、聖書を片手に伝道する原理主義キリスト教（プロテスタントの一派で聖書の創造説を堅く信じる）の説教師のように、禅の伝道者が街頭で「正法眼蔵」を振りかざして宣伝している光景など、想像する事もできないほど滑稽なことである。当然の事であるが、道元禅師の「只坐れ（只管打坐）」という教示は、大衆に向けて多大な熱気をもった布教活動をするのには適していない。曹洞禅仏教徒は招かれたところへ行き、機会のある時に教え、地方や個人の実情に従って、人々がそれぞれの宗教的修行において成長するのを助ける。これ以外の何か別のやり方のほうがより効果があがるのではないかと問いかける事は全く見当違いである。禅の指導者がそのスタイルを変える事は無いだろう。そして、彼らは信者の数が増えればいいという福音主義的膨張をそれほど気にかけていないのだ。教えをもっと広く普及させるのは素晴らしい事であろうが、坐禅の道がそれぞれの生活の中で適切なものかどうかを個人個人が決断する事を要求されている。世界が世界自身を救うためには道元禅を学ばねばならないというような強要意識は全くといっていいほど共有されていない。

昨年12月、私はノース・カロライナ州にある禅センター・オブ・アシュヴィルで数日を過ごした。私は何年も前にアシュビルには行ったことがあり、スモーキー・マウンテンとブルー・リッジ・パークウェイを訪れて休日を過ごした。そこは壮観で美しい場所として私の心に残っている。この度の旅行では、サンタ・クルーズやビッグ・サーで感じたのと同じく、アシュヴィルのニュー・エージの文化と精神的な多様性が印象に残った。滞在中、私はサウザン・ダルマ・センターに短時間立ち寄った。アシュヴィルの町の外、山又山の中にあり、多彩な仏教徒やその他のグループが利用しているリトリートのための施設である。アトランタへ戻る飛行機の中で、2人の中年の（私が思うに、彼女たちは私よりも年上であろうという意味）女性が後ろの座席で、週末のヴィジョン・クエスト（ネイティブ・アメリカンの宗教に由来する一種の瞑想）研修会の話をしていた。機内の騒音が許す限りの盗み聞きであったが、私は彼女達が少なからぬ時間をそうした追求のために捧げていることを感じ取った。

貞静・ミュニック師は1992年に、常住の指導者からの援助と指導を希望していた地元の禅仏教徒からの招待を受け入れて以来、アシュヴィルに住んでいる。その地域の人々の禅仏教への興味を基盤として、貞静師の精力的な指導と献身的な努力が、堅固で精力的な共同体の発展を導いてきた。住宅区域内に小さな家（約90㎡と地下室）を借り、そこで夕方の坐禅指導と勉強会、土曜日の参禅会、年に何回かの摂心、時折の持ち寄り夕食会、その他の仏教行事などからなる、恒例の活動を行っている。例えば、私が訪れた週末には、禅センター・オブ・アシュビルの資金づくりのための、クラフト展示即売会と持ち寄り夕食会が行われ、百人内外の人が集まった。土曜日の坐禅会や夕方の勉強会の出席者は、勿論もっと少人数である。私が訪れた土曜日には、およそ12名ほどの人達が1，2炷坐り、そのうち数人は全てのスケジュールをこなしていた。

禅センター・オブ・アシュビルは、貞静師の個性と土地柄にふさわしく、気さくな、堅苦しくない禅センターである。人々は時間のある時に来て、時間の許すだけ居て帰っていく。いくつかの大規模な禅センターで見られるような形式的な堅苦しさは全く見られない。そこには禅堂での過剰な規則もない。他の場所で坐禅の時に要求されるように、私は地味な色の服を着ていたが、ここではそうしなければならないという事は無かった。経行中、私の眼はどうしても、様々な坐褥や坐蒲の取り合わせに引き付けられた。なかでも上品に、控えめに表現された金欄を施した坐蒲や、ピンク・青緑色・茶色を使った暖かい大地の色調のモダンな多角形クッションの初心者セットといった物があった。昼食は禅堂で営まれ、それは打ち解けた会話の時間であった。とはいえ摂心中は静寂が原則であると聞かされた。また南部地方特有の歓待が未だ生き続けていることを報告できる事をうれしく思う。貞静師と私が会った限りの彼女のサンガ・メンバー達から、私は素晴らしく歓迎され、喜んでインタビューの要望に応じていただいた。全ての人々に心から感謝している。

貞静師にスケジュールを調整していただいたおかげで、私はアシュビルで、大体40分から1時間半にわたる、8つのインタビューをすることができた。それぞれの人のバック・グラウンドや、禅の修行への様々なレベルのかかわりかたという意味で、話を聞いた人々（一組のカップルも居た）の範囲の広さもまた印象的であった。そして私は彼らの人生のいくつかの物語は、それだけでも話される価値があると信じている。私はまた貞静師やそのグループのメンバー達との肩の凝らな

いおしゃべりに何時間も費やした。私は彼女が教えるところを聞く機会はなかったけれども、彼女が坐禅を非常に強調していること、そしてそれが禅センター・オブ・アシュビルに人々を惹き付け、また彼ら自身の修行に対するそれぞれ違ったアプローチを指導するのに重要な役割を演じていることは明白であった。

紙数に制限があるので、ここでは只一人の人とのインタビューに焦点を絞りたい。ノース・カロライナ州西部の宗教文化のなかでの彼の経験は、人生を変革するための佛教の力の恰好の手本である。リチャード・デリンジャーは50才で独身、現在、在庫品係・データ登録係として働いている。(私は、彼は同じような仕事を転々としてきたのだろうと推測する。私たちの話の中では、発育障害のある人々の施設で短期間、用務員をしていた事が話題に上がっただけだったけれども。) リチャードは現在アシュビルの住民であるが、ブルーリッジ・パークウェイを降りてすぐのスプルース・パインという山の中の小さな街で育った。そこはアッシュヴィルの町から車で約1時間ほどの所にあり、テネシー州との州境の方が近い場所である。スプルース・パインで、南部バプテスト信者として育ったけれども、彼は少年の頃、短期間ではあるが、ローマ・カトリックの青少年プログラムにも参加した。(そこで彼はカトリックにおける信仰を表すロザリオ〔数珠を繰りながら祈りを唱える〕を習いはじめたが、近所の人のうわさ話に困惑した両親によってそのクラスからつれ戻された。) 彼はいつも宗教的、哲学的事柄に興味を持っており、一時は、神学校のクラスを取って牧師になろうと考えていた。その頃の事を振り返って、彼は今、自分のキリスト教へのアプローチは、もしもっと勉強すればそのうちに理解できるだろうという希望に基づいたものであったと語る。

1987年頃、リチャードの母が病にかかり、彼は1994年に彼女が他界するまでの間、その世話をした。その間のことだが、メンフィスの新聞に、「キリストについて聞いた事が無く、それゆえにキリストを受け入れることがなかった人々は永遠の罰を受けるように定められている。」というコラムが掲載された。リチャードは、「キリスト教の愛の神は、かれら自身の落ち度では無い事のために人々を地獄へ落とすことは決してないだろう。」という意見を書いて投書した。その新聞の編集者への投書の中で、いくつかは、リチャードが、もとのコラムを執筆した聖職者を不当に攻撃したとのべた。彼自身にはそんな意図は全く無かったのだけれども。他の人々の投書は、リチャードは異端的な見解によって、彼自身に破滅を宣告したのだと語った。しかし、彼自身の心の内では、個人攻撃をしたのでは無いという事に疑問の余地は無く、死後の生に対しても何も恐れる事は無かった。彼は只単純に、彼が何を信じるべきか、そして原理主義キリスト教は彼が信ずべきものではない事をはっきりとさせようとしただけだったのだ。

同じ頃、リチャードはユニテリアン・ユニヴァーサリスト(三位一体説に反対し、キリストの神性を否定し、万人救済論を説くプロテスタントの一派)の教会を知り、それに参加した。今もその活動を続けている。その教会の礼拝に出席するために、毎週日曜日にはアシュビルまで自動車で通っていたが、母親が亡くなった後(彼の父は30年早く亡くなっている。)もっと容易に礼拝や他の会議に出席することができるように、1995年にアシュビルへ移った。スプルース・パインで出席していた南部バプテスト教会の硬直した独断主義とは対照的に、ユニテリアン派の人々は、その考え方も、共同体意識も、暖かく、解放的だった。1990年頃からずっと自己流で瞑想を試みてはいたが、貞静師がその教会で行った数回の講義に基づいて、彼が本当に修行に出会ったのはほんの2, 3年前のことである。昨年、彼は毎晩20分間呼吸を数えながら坐った。貞静師が土曜日の坐禅をしてみるように提案したが、そこまでするのは気乗りがしなかった、と私に語った。彼は家で使っている坐蒲にとても坐り慣れて、禅堂のあり合わせの坐蒲では痛くてしようがないから来たくないのだ。自分の坐蒲を持って来ればいいのではないかと私が指摘すると、彼はそれはそうだと同意した。私の見たところ、彼をひきとどめている本当のものは、ただ単に、一歩づつ慎重に進む人柄なのだという事である。

彼の話の中でもう一つの重要な点は、リチャードは、軽度の聴覚の障害をもっていることである。それが彼の人生に色々な影響を与えたであろう事は想像にかたくない。彼が、私のいう事を聞き取るのに困難を感じているようには全く見えなかったが、彼自身の発音はやや不明瞭で、2, 3度私は聞き直さなければならなかった。私がこの事に言及したのは、ただ、彼の今までの人生の中で、おそらくリチャードの周りの人々は、しばしば彼を過小評価して来ただろうという印象を持ったからである。彼の第一印象とは対照的に、彼は深い探求心を持っていて、キリスト教と仏教の宗教文学を(そして間違いなく、我々が話題にしなかった分野のものも)幅広く読んでいた。私との対談の中で彼は、多くのキリスト教著述を書いた英国国教会派の司教スポングやイエス・セミナ(1985年にロバート・ファンクによって始められ、100人以上の学者が参加している歴史的イエスを論じる集会)の多数の著書、また様々な仏教指導者の著作に至るまで、彼に影響を与えた文献とその著者名をすらすら言ってのけた。リチャードはまた慈友・ケネット老師の録音したテープを覚えている。その中でケネット老師は、ある主張が宗教的な権威を持っている人の口からでたものだから受け入れるというのではなく、自分自身でそれを吟味して見なければならないという釈尊の態度について話していた。ケネット老師のアプローチは仏教の教師としては例外的に、有神論的であると彼が認めたから、ケネット老師の言説を評価したというニュアンスがあるのはいかにも彼らしい。

リチャードは人生のこれからの10年間に、彼自身の宗教の路を歩み続けていくと私は確信している。現時点では、その

道が、だんだんと大きくなりつつある曹洞禅との関わり、とりわけ増えつつある坐禅修行への参加、を含んでいることは確かなようである。彼の例は仏教全体が、そして特に曹洞禅がどのようにアメリカ社会の辺境にまで浸透しているかということを示している。彼は自分のライフ・ストーリーを冷静に物語ったが、多大な個人的な苦悩がその人生の中に含まれているのは確かである。男女同権主義者の慣用句を借りて言うと、私は、彼の精神的な道に対する誠実な態度を誉め讃える。そして、私にそれを語ってくれた事に感謝する。（リチャードは親切にも、ここに彼の物語りを書くことと、貞静師が彼のデジタルカメラで撮ってくれた私達2人の〈禅堂スーパードッグのデイジーを含めた〉写真を掲載する事に快く同意してくれた。）

リチャード・デリンジャーのライフストーリーは現代アメリカにおける曹洞禅について、いくつかの重要な教訓を具体的に表現している。最初に、もちろん仏教が、文化的にひどく制限された境遇に育った人々にも生き方の指針を与え得るほどに、アメリカの社会に深く浸透していることを学ぶのは、心暖まる事柄である。私はスプルース・パインには行ったことがないし、私が観光客として、ブルー・リッジ・パークウェイを上がったり下がったりして遊山旅行をしたとて、その土地について些かでも知っているなどとはとてもいえないだろうけれども、しかし、文化的な距離感はリチャードの身の上話しの中で明瞭であった。明らかに、リチャードが仏教について学ぶことができたのは、仏教自身についての資料の数が増加したことだけではなく、20世紀後半のアメリカ全土にわたって、どこに居ても出版物やマスメディアの情報を利用することが可能になった事に基づいている。

第2に、リチャードの探求は完全に自発的なものであった。宗教的、哲学的な物事への彼の深い好奇心は終生変わらないものである。それはあのカトリック教育との短期間の接触でさえ、彼の人生のずっと遅くまで満たすことができなかった「切望」を残したのである。それは、彼が子供の時には終えることを許されなかったロザリオの学習を完結した時であった。彼の探究の道中で助けてくれた様々な教会の何人かのメンバーについて、又宗教者としての素晴らしい手本だと考えた人々について、彼は語ったけれども、特定の個人を彼の人生における指導力として言及する事は決してなかった。貞静師は尊敬されるべきガイダンスの源ではあるけれども、しかしそれは感情的に依存するような、あるいは押し付けがましい存在ではないから、彼の精神的方面での貞静師の役割はこの型の中にとどまる。リチャードは独立独歩の人である。

第3に、私はリチャードの話の中でユニタリアン・ユニバーサリスト教会が演じた役割に感銘を受けた。それは私にマサチューセッツ州のフラミングハムやインディアナ州のブルーミングトンといった他の地域で、曹洞禅の修行者から私が耳にした話しを思い出させた。この派の教会やその他のリベラルな教会やシナゴーグ（ユダヤ教会堂）が、北アメリカにおける禅の修行への一つの通路としてどれほど広く機能しているかという事を学ぶ事は有益である。実際のところ社会学的に見て、私はそのような教会やシナゴーグは、禅だけでなく、メインストリーム以外のあらゆる範囲の宗教および、セルフ・アウェアネス（自己覚醒）の試みへと導く入り口として機能しているのではないかと推測する。

第4にリチャードは現在、貞静師と曹洞禅が提供するモデルによって修行しているのだけれども、我々の短時間のインタビューからは、道元特有の仏教哲学の原理が、彼をなにか、独特で意味深い方向へと動かしたことを示唆するものはほとんどないという事である。この印象は単に、いかに短時間しか私達が共に過ごさなかったかという産物であるかもしれない。また私はこの点を今後の訪問の際に調査していくつもりである。しかしながら、少なくともこの一つの個人的な例において、曹洞禅が、曹洞宗の開祖自身による、非常に顕著で明白な役割なしに「活動している」という事は注目すべきもののように思われる。私はかつて禅・マウンテン・モナストリーで、ある僧侶から聞いた、そこの参禅者は、曹洞禅または臨済禅の宗派としてのアイデンティティをほとんど自覚していない、というコメントを思い出した。リチャードの場合、彼の話に登場した曹洞宗の教師は、慈友ケネット老師ただ一人であった。彼はティク・ナット・ハンやペマ・チョドロンやラマ・スリャ・ダスやジョセフ・ゴールドステインにより深い影響を受けていたようだった。こうした所見は、リチャードの宗教的アイデンティティの中で、道元の名前が最重要な位置を占めているのではない事と、そして曹洞禅の教えの包容力のある寛容性が彼に滋養に富んだ精神的環境を提供しているという両面を提示する。

数年前に出版されたトライ・サイクル（仏教の専門誌）の記事で、ジャン・ナッティエ（インディアナ大学教授）はアメリカにやって来た仏教はそのもたらされ方によって3種類あると提案した。それらを彼女は「輸入品」、「輸出品」、「手荷物」というニックネームで呼んでいる。アジアの仏教徒達がそれ以外の彼等の民族文化と共にその宗教を持ち込み、その民族的ルーツとのつながりを維持する方法としてその宗教の実践を続ける時、彼女は（如何なる否定的な意味も含ませないで）その仏教はそれらの人々の総合的文化の手荷物の中に存在していたのだと書いた。在家の日蓮宗信者の新興宗教である創価学会をその顕著な例としてあげて、他のアジアの仏教徒達が、世界に仏法を広める事を使命として実行する時、その積極的な伝道の努力は宗教組織の「輸出」となる。彼女の類型学によれば、アメリカの禅は第一義的には、異なる現象の現れである。そこでは、必ずしも民族的、文化的に、アジアと絆を持っているのではないアメリカ社会での参加者が積極的な役割を果たしている。彼等は、自分自身のための宗教を探しているのである。彼女はこれを「輸入」の試みと呼んで分類する。リチャード・デリンジャーの場合は仏教の布教活動がアメリカ社会の奥地にまで到達しているという事と、

「輸入」の現象の個人の内面的な原動力との双方の好個の例である。

私の『坐禅参究帖』（七）

藤田一照
パイオニア・ヴァレー禅堂

《断想　17》　「ただ坐禅」

前の断想で「凡夫性の封印」とか「仏性の開封」とかいうことを書いた。確かに坐禅のなかでそういうことが起こっていると私は思う。それが坐禅の「功徳」だといっていいだろう。しかし、そういう功徳を得んがために、それを目標として立て、それをめざして坐禅しなくてはならないというのではない。実は、そんな必要はまったくない。そんなことを心配せずとも、坐禅がただ坐禅になっているなら、ちゃんとそういう功徳が備わるようになっているのだ。それどころか、功徳欲しさにそれをめざしてがんばればがんばるほど、それが遠ざかるという皮肉なことが起こる。

坐禅においては、そういう「アテ」や「見込み」、「つもり」の持ち込みは一切厳禁になっている。どんな高尚なことでも、それを目標にかかげて坐禅のなかに混入させるならば、それは、坐中のはからいとしてあらわれ、坐禅している自分とその目標をみている自分とに分裂が生じ、坐禅にヒビがはいってしまう。そして修行者の坐禅への命中を妨げることになるからだ。（「作仏を図るなかれ！」）だから「こうなろう、ああなろう」というような未来に向かっての余計なはからいを一切放下して、今、ただ坐禅することに全力を尽くすしかないのだ。

しかし、坐っている当人には、そういう坐禅の成果や効果をのぞきみることはできない。その誘惑に負けた途端、坐禅から外れてしまうのだ。それは、ぐっすり寝ている自分を、そのまま自分の目で見ることができないようなものだ。もし見ようという気を起こした時は、その途端に眠りが消え失せてしまう。

> *（「このもろもろの当人の知覚に昏ぜざらしむることは、静中の無造作にして直証なるをもてなり。・・・もし覚知にまじはるは証則にあらず」『弁道話』）*

結局、ここでも「いい坐禅になってきた」とか「うまくいった」といった傍観者的評価の余地なく、的中をねらってよそ見せず、ただ坐禅しているしかないということになる。

だからいずれにせよ、坐禅するとは、なんらかの「功徳・効果」をねらってするのではない。ただ坐禅が徹底して坐禅になっていればそれで良い。坐禅はその他に何も必要としない自己完結した営みなのだ。従って、坐禅を坐禅として実際に行ずる上では、いかなる「前口上」も「効能書き」も全く必要ない。むしろそんなものがない方が誤解が少なくて良いとさえいえるかもしれない。《断想15》で紹介した横山祖道老師がいうように、「このように脚を組み、手を組み、腰を伸ばしてあごを引いて云々」とそれだけを指示すればそれで充分なのだ。

しかし、不思議なことに、こうして「功徳・効果」とは一切無関係に「ただ坐禅」する時、かえって、本人の思わぬところで無量無辺の「効果・功徳」が自然に与えられるということが起きるのだ。だから、坐禅に「功徳・効果」があるとしても、それはこちらが意志意図して求めた結果として獲得したものではなく、全く予期せずして賜ったものだというしかない。したがって、それを自分の手柄として誇ることはできないのだ。「坐禅すると〇〇の効果・功徳がある」（〇〇の例としては悟り、平安、自由、落ち着き、慈悲のこころなどいろいろあげられる）というような文をどこかで見たり聞いたりしたとしよう。すると、今の自分にその〇〇が欠けていると思っている人は、自分なりにその〇〇はこういうものだろうとアタマに理想を思い描き、その〇〇に接近しようと一生懸命に坐禅に励む。こういう例が多いのではなかろうか。しかし、今まで述べてきたように、そういうやりかたでの坐禅は見当外れで、実は坐禅になっていないのであり、したがってその文章が「坐禅の功徳・効果」として約束している〇〇は残念ながら、いつまでたっても得られないことになる。

例えばここに、自分はいつも心がイライラしていて怒りっぽい人間だと思っている人がいるとする。当人自身もそれに困って、なんとか心を平安にし、いつも平静でいられるような人間になりたいと願っている。たまたま「坐禅によって心の平安が得られる」ということを誰かから教わり、「これはいいことを聞いた。この方法なら自分を変えられるかもしれない。」と、さっそく坐禅を始めた。そして坐禅のなかに、自分が思い描いた「平安」をさがしだそうとしている。また坐禅の功徳を積んで、自分の中に彼の思う「平安」を増やそうと思っている。

果してこの人は「平安」な人になれるだろうか。私はこのままではそれは無理だろうと思う。その人が理想として描いた「心の平安」とは、実は本人が嫌っている「イライラ」のネガ像・裏返しの投影でしかない。この人にはまだ「心の平安」がどういうものであるか本当にはわかっていないのだ。だから「平安」を求めるどの行為にも「イライラ」が忍びこんでいる。自分の「イライラ」をそのまま受容できないことがとりもなおさず「イライラ」なのだ。たとえその人が「自分は少しは平安になってきたな」と思ったとしても、それは「イライラ」の手がこんできて変装が上手になっただけのこと

なのだ。こうして「イライラ」がますます根深くなっていく。

ではどうすればよいのだろう。まず、「自分はイライラして、怒りっぽい人間だ。そしてそれはいけないことだ。」という言葉、概念、価値判断を介して自分を見ることをいったん止めてみること。そしてそれを変えようという性急な願望を棚上げにしてしまうことだ。実は、正しい坐禅というのは、彼がやったように「イライラ」を鎮め「平安」を強いてつくり出そうとすることではなく、そういう「手放し」状態にみずからを置くことだったのだ。それができた時、思いでつかんだツクリモノの自己ではない、身・口・意のそれぞれにおいて、今、実際にイライラしているナマの自分の姿が、直接に見えてくるのだ。

坐禅が坐禅であることによってはじめて可能になる、この「イライラの実相を深く如実に見る」ことで、「イライラ」そのものが本当の意味での「平安」に自然と変容していく道が開けてくるのだ。「イライラ」と別なところに「平安」があるのではない「イライラ」をたとえにして説明してきたが、坐禅によって起こる変容というのは、大雑把にいえばこういう性格のものだといえないだろうか。

北アメリカ開教総監部・開教センターニュース

◎2000年10月28日に道元禅師ご生誕800年記念法要が、北アメリカとハワイの日系アメリカ人の曹洞禅コミュニティーと共にネバダ州のラスベガスで行われました。

◎道元禅師750回大遠忌予修法要が2001年5月12日に禅宗寺で行われます。

◎1998年にカリフォルニア州タサハラ禅マウンテンセンターにて開催された、開教センター摂心の講話録「Sitting Under The Bodhi Tree」が4月中に開教センターより出版されます。

◎3月9日から11日まで、サンフランシスコ禅センターにおいて曹洞禅連絡会議が開催され、19の寺院、及び禅センターから32名の参加がありました。連絡会議で話し合わされた内容は以下の通りです。

1.アメリカの現状を踏まえた上で、今後何が必要か？（曹洞禅僧侶になることを希望している人の養成機関について）
2.在家得度を主とした授戒の定義について

また、11日午前中には、来る5月12日に厳修される高祖道元禅師七百五十回大遠忌・北アメリカ予修法要の法式説明会が行われました。

北アメリカ開教センター活動予定

２００１年４月～１０月

宗典講読会

日時：　4月8日、5月6日、6月3日、7月15日（午後2時より講義のみ）、8月12日、9月9日、10月14日の各日曜日

午前　８時３０分　坐禅
　　　９時１０分　朝課
　　　９時３０分　作務
　　　１０時　　　奥村正博開教センター所長による講義

会場：　カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺

内容：　正法眼蔵（仏性の巻）

仏教講演会

日時：　4月1日、5月6日、6月3日、7月1日、8月12日、9月2日、10月7日の各日曜日午前10時
加藤和光北アメリカ開教師による講義

会場：　カリフォルニア州ロスアンゼルス禅宗寺

内容：
4月1日　釈尊の誕生と花祭り
5月6日　坐禅とは何か？
6月3日　禅の歴史
7月1日　お盆の行事
8月12日 禅の真髄：脚下照顧
9月2日　禅の真髄：生死からの解脱
10月7日 般若の思想を反省する時期

摂心

日時：　2001年6月18～22日
場所：　パイオニアバレー禅堂

日時：　2001年10月19～26日
場所：　タサハラ禅マウンテンセンター